OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	移動様態動詞や音放出動詞と共起するawayの意味解釈について : クオリア構造による分析
Author(s)	山本, 恵子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 89-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69881
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

移動様態動詞や音放出動詞と共起する *away* の意味解釈について
―クオリア構造による分析―

山本恵子

1. はじめに

不変化詞 *away* は、(1)の有方向移動動詞 *go* と共起する場合、「離れて」という方向を意味し、*away* の解釈は一義的である。一方、*away* が、(2)の移動様態動詞 *walk* や(3)の舞踏動詞 *dance* と共起する時、文脈の有無や個人差によって、*away* は方向の意味にも事象アスペクト（継続）の意味にもなり得る。(2a)のように、*walk* と *away* が共起する場合、本来、*away* は方向の意味で解釈されるが、(2b)のような文脈が加わると、*away* は継続相の意味に解釈される。(3)のように、*dance* と *away* が共起する場合、*away* の解釈は人によって異なり、継続相の意味か方向の意味のどちらか一方の解釈になる。[1] 最後に、(4)と(5)の文は、いずれも同じ音放出動詞と *away* の組合せであるが、主語名詞の意味によって、*away* は方向の意味、もしくは、継続相の意味のどちらか一方の解釈に限定される。

(1) Bill *went away*. (ビルは行ってしまった。)

(2) a. Bill *walked away*. (ビルは歩き去った。)

b. The seniors spent every day *walking away* in the mall for their exercise.
(年配者は運動のためにモールでずっと歩いて毎日を過ごした。) (高見 2015:65)

(3) Bill *danced away*. (ビルは踊り続けた。／踊りながら立ち去った。)

(4) a. The bullet *whistled away*. (銃弾がヒュッと飛び去った。)

b. The kettle *whistled away*. (やかんがヒューヒュー音を立て続けた。)

(5) a. The truck *rattled away*. (トラックがガタガタ音を立てて走り去った。)

b. The sewing machine *rattled away*. (ミシンがガタガタ音を立て続けた。)

本稿では、(2)から(5)の文の *away* の適切な解釈を引き出す上で、語彙概念構造(LCS)による分析の限界を指摘し、Pustejovsky (1995)で提唱される生成語彙論の意味表示（事象構造・クオリア構造）と、共合成という操作を用いた分析が必要であることを主張する。2 節では、先行研究の問題点を指摘し、3 節では、Jackendoff (1990)の LCS と整合する形にアレンジした意味表示を、主語名詞、動詞、*away* に対して、それぞれ提案する。これらの語のクオリア構造で指定される意味情報が、*away* の適切な解釈を引き出す上で、不可欠であることを論じる。4 節で、本論をまとめる。

---

[1] Jackendoff(1997: 539, 540)では、*dance* や *waltz* のような舞踏動詞と *away* が共起する場合、*away* は継続相の意味で解釈されている。一方、高見(2015: 66)では、*dance* と *away* が共起する場合、*away* は移動の意味で解釈されている。そのため、*away* が継続の意味で解釈される場合、*They danced away last night.(高見 2015: 66)という文は意味的に不適格な文として扱われる。

2. 語彙概念構造(LCS)による分析

2.1 有方向移動動詞や移動様態動詞と *away* の共起

Jackendoff (1990)で提唱されるアプローチのもと、(6)の文を分析した場合、*away* は動詞の意味項であり、*away* の方向の意味は、*go* の経路項の意味に融合される。(7a)は、Jackendoff (1990)によって提案される有方向移動動詞 *go* の語彙項目である。(7a)の語彙項目で、*go* は統語的に前置詞句(PP)を項に選択し、LCS では物体と経路を意味項に選択することが指定されている。(7a)の LCS は物体が経路を移動することを表す。PP は経路項を表すことが同一の指標が与えられることにより示されている。

(6) Bill *went away*. (=1)

(7) a. $\left[\begin{array}{l} \text{go} \\ \text{V} \\ \text{__ PP}_j \\ [_{\text{Event}}\ \text{GO}\ ([_{\text{Thing}}\ \quad],\ [_{\text{Path}}\ \quad]_j)] \end{array}\right]$ (Jackendoff 1990: 57)

b. [Path AWAY-FROM ([Place A PARTICULAR PLACE])]

c. [Event GO ([Thing BILL], [Path AWAY-FROM [Place A PARTICULAR PLACE])])]

本稿では経路(方向)を表す *away* について、(7b)の LCS を提案する。[2] Jackendoff(1997: 541)では、*away* は方向(経路)を表す前置詞句 (a directional path intransitive PP)とみなされるので、*away* は *go* の語彙項目で指定される経路を表す PP の特性を満たす。その結果、*away* の LCS は GO の Path 項に代入される。また、*Bill* は GO の Thing 項に代入され、(7c)の LCS が形成される。このように、*away* が表す方向の意味は動詞の経路項の意味をさらに指定する役割を果す。一方、(8)の動詞 *walk* や *dance* は、Jackendoff(1990:88)の分析では、移動様態動詞として分類され、動詞自体、内的な動き(internal motion)や身体動作(bodily action)のみを表し、経路を含意しないため、Jackendoff (1990: 89)では、(9a)の LCS が提案される。MOVE は物体のみ意味項に選択し、経路項をとらない。しかしながら、実際には、MOVE クラスの動詞の中には、(8)のように、経路表現と共起するものもあるため、Jackendoff (1990:90, 224)では、(9b)の GO 付加詞規則によって、随意的に、移動様態動詞に GO 関数が編入されることが提案されている。

(8) a. Bill *walked away*. (=2a)

b. Bill *danced away*. (=3)

(9) a. [Event MOVE ([Thing])] (Jackendoff 1990: 89)

b. GO-Adjunct Rule (version2)[3]

[VP V_h . . . PP] may correspond to

$\left[\begin{array}{l} \text{GO ([}\alpha\text{], [}_{\text{Path}}\ \quad\text{])} \\ \text{AFF ([ ]}^{\alpha}_{i}\text{,)} \\ \text{[WITH/BY [MOVE ([}\alpha\text{])}_h\text{]} \end{array}\right]$ (Jackendoff 1990: 224)

---

[2] *away* はある特定の場所からある不特定の位置に離れたことを意味するため、統語的に from 句が具現化されなくても、LCS レベルでは常に起点が含まれているものと考える。

[3] LCS の AFF 関数は動詞が活動動詞であることを表す(Jackendoff 1990: 214, 215)。

(9b)の規則の適用条件として、動詞が MOVE クラスの動詞であれば、(9b)の規則が適用されることになる。(9b)で、動詞が表す意味は様態、手段を表す従属節に組み込まれ、前置詞句の意味は GO の経路項に代入され、主語は移動主(Theme)と動作主(Actor)の意味役割を担うようになる。 (8)の文で、動詞 *walk, dance* は、いずれも MOVE クラスの動詞であるため、GO 付加詞規則が適用される。(10)の LCS は、(8)の文全体の意味を表す。

(10) $\left\{ \begin{array}{l} \text{GO ([}\alpha\text{], [}_{\text{Path}}\text{ AWAY-FROM ([}_{\text{Place}}\text{ A PARTICULAR PLACE])]} \\ \text{AFF ([BILL]}^{\alpha}_{i}\text{,} \quad \text{)} \\ \text{[WITH/BY [MOVE ([}\alpha\text{])}_{h}\text{]} \end{array} \right\}$

GO 付加詞規則は、GO 関数を持たない移動様態動詞が経路表現と共起することを可能にする上で優れているが、GO 付加詞規則に関して、次の二つの問題がある。まず一つは、GO 付加詞規則が適用される条件は、動詞が MOVE クラスであることだが、実際には、経路表現と共起しない *laugh, sneeze* のような動詞も Jackendoff (1990: 90)では、MOVE クラスに分類されるため、GO 付加詞規則は、(11)のような不適格な文まで過剰生成することになる。

(11) *Bill *laughed/sneezed into the room*.

二つ目の問題は、(12)の文は、Jackendoff (1997: 539, 540)で、継続相を表す *away* の例として取り上げられている。しかしながら、この文は移動様態動詞と経路を表す不変化詞の組合せから成るため、GO 付加詞規則が適用されることも可能である。そのため、(12)の *away* の解釈は方向の意味にも継続の意味にもなり得て、曖昧である。

(12) a. Judah *jumped away*. (Jackendoff 1997: 539)

b. Lois and Clark *danced away*. (Jackendoff 1997: 540) [4]

Jackendoff (1997:539)では、継続相を表す *away* について、*Bill slept/waltzed/drank/talked/read/sneezed away* は‘Bill kept on V-ing’をおおよそ意味するという言及に留まり、*away* の継続相の解釈を引き出す具体的なメカニズムは解明されていない。このため、移動様態動詞と *away* が共起する場合、どのようなプロセスを経て、方向と継続相の二つの *away* の解釈が引き出され得ることになるのか、Jackendoff(1990, 1997, 2002b)の分析では明らかでない。このように、LCS による分析には問題がある。この問題について、Pustejovsky (1995)で提案される意味表示を使用することが問題解決の糸口になることを 3 節で論じる。

2.2 音放出動詞と *away* の共起

(13a)の文は、(13b)と同じ音放出動詞が使用されているが、文の容認度は異なる。影山・由本(2001: 158)によれば、(13b)の動詞が表す音はライオンの移動の必然的な付随物ではないが、(13a)の動詞が表す音は移動の必然的な付随物であり、また、その音はメトニミーによって移動そのものと同定できる性質にある。この観察に基づき、(13a)の音放出動詞に対して、(14)の LCS が提案されている。

(13) a. The first police cruiser *roared through the gates* in hot pursuit. (影山・由本 2001: 157)

[4] (12)の文は Jackendoff(1997: 539,540)で、継続相を表す *away* の文として取り上げられている。

b. *The lion *roared into the cabin*. (影山・由本 2001: 159)

(14) y MOVE
|
[with a 'roar' sound] (影山・由本 2001: 158)

影山・由本(2001: 143)で使用されている概念関数 MOVE は Jackendoff(1990: 89)で使用されている MOVE と異なり、MOVE 自体が移動概念を表すため、移動物(y)と移動経路(Path)を意味項に選択する。(14)において、音放出動詞が表す特徴的な様態は MOVE に下位指定される。影山・由本(2001)の分析では、音放出動詞が移動を含意するケースと移動を含意しないケースを考慮して、音放出動詞に対して二つの語彙項目を仮定しなければならないが、Pustejovsky (1995)で提唱される意味表示と共合成の操作を用いれば、音放出動詞に移動の意味を新たに加える必要はなくなることを 3 節で論じる。

3. クオリアによる分析

3.1 節で、*away* の意味表示を提案した後、*away* が活動動詞と合成するプロセスを確認する。3.2 節で、移動様態動詞と共起する *away* になぜ二つの解釈が生じ得るのかについて議論し、3.3 節で、音放出動詞と *away* が共起する場合、主語名詞の意味が文全体の意味にどのように作用するのかを明らかにする。

3.1 *away* の意味表示

(15)は、Pustejovsky (1995: 126)の経路表現 *into the cave* の意味表示に倣って作成した *away* の意味表示である。[5]

(15)
$$\left[\begin{array}{l} \text{away} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = \text{x: physobj} \\ \text{D-ARG1= a: a particular point} \\ \text{D-ARG2= b: an unspecified point} \end{array}\right] \\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l} E_1 = e_1\text{: process} \\ E_2 = e_2\text{: state} \\ \text{RESTR} = <_\alpha \\ \text{HEAD} = e_2 \end{array}\right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = [_{\text{State}}\ \text{x NOT BE } [_{\text{Place}}\ \text{AT a}]] \ \&\ [_{\text{State}}\ \text{x BE } [_{\text{Place}}\ \text{AT b}]]\ (e_2) \\ \text{AGENTIVE} = [_{\text{Event}}\ \text{x GO } [_{\text{Path}}\ \text{FROM a TO b}]]\ (e_1) \end{array}\right] \end{array}\right]$$

away は意味項に移動主、起点、着点を選択する。起点はある特定の位置を表し、着点は未指定の位置を表す。*away* のクオリアの主体役割は *away* が移動概念を前提としていることを表し、形式役割は移動後の結果状態を表す。さて、(15)の意味表示は、活動動詞と *away* の共起を説明する上で、LCS よりも優れている。*away* は通常、*sing, talk, dance, eat* のような活動動詞と共起する場合に、継続相の意味になるのだが、LCS の分析では、活動動詞が表す概念関数 ACT は意味項に動作主項しかとらず、*away* のような経路項を選択できない。

[5] 冒頭で言及した通り、Jackendoff (1990)の LCS と整合性を持たせるため、クオリアには、LCS による表記を採用する。

そのため、LCS 分析ではなぜ活動動詞と *away* が共起できるのか説明できない。

以下では、(15)の *away* の意味表示が、活動動詞と *away* の意味合成の説明を可能にすることを論じる。 まず、(16a)は活動動詞の意味表示である。[6] 主体役割に、x が活動するという意味情報が指定され、構成役割に各活動動詞に特徴的な様態や手段の意味情報が記載される。(16a)の活動動詞の事象構造は、PROCESS であり、継続相であることを表す。 (16a)の活動動詞の主体役割は活動事象を表し、移動を含意しないため、LCS 分析でも言及したように、活動動詞が表す活動事象の意味に *away* の意味を付加することはできない。しかし、活動動詞と *away* の共起によって、次の概念作用が起こることを仮定する。活動動詞と *away* の共起によって、The Event-for-Time metonymy と The Moving Time Metaphor (Lakoff and Johnson 1999: 137-159)の概念作用が働き、活動動詞が表す継続事象は継続時間として概念化され、さらに、移動物と認識される。それに伴って、*away* は時間（事象）の移動を表す。この場合、活動動詞が表す活動事象は未来から過去に向かって、静止している概念化者を通り過ぎてゆく無限に連なる物体として概念化される。この概念作用は、(15)の *away* の主体役割の移動主項に(16a)の活動動詞の主体役割の意味情報を合成することによって捉えることができるため、クオリアにおける合成操作として扱うことができる。

(16) a.
$$\begin{bmatrix} \text{activity verb} \\ \text{ARGSTR} = \begin{bmatrix} \text{ARG1} = \text{x: physobj} \\ \text{D-ARG1} = \text{y: physobj} \\ \text{S-ARG1} = \text{d: a characteristic manner or means} \end{bmatrix} \\ \text{EVENTSTR} = [\ E_1 = e_1\text{: process}\ ] \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} \text{CONST} = \text{d} \\ \text{FORMAL} = \text{Unbounded event} \\ \text{AGENTIVE} = [_{\text{Event}}\ \text{x ACT (on y)}]\ (e_1) \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

b.
$$\begin{bmatrix} \text{sing away} \\ \text{ARGSTR} = \begin{bmatrix} \text{ARG1} = \text{x:} \begin{bmatrix} [_{\text{Event}}\ \text{x ACT}] \\ \text{FORMAL} = \text{Unbounded event} \end{bmatrix} \\ \text{D-ARG1= a: a particular point} \\ \text{D-ARG2= b: an unspecified point} \\ \text{S-ARG1} = \text{d: } [_{\text{Manner}}\ \text{MAKING MUSICAL SOUNDS}] \end{bmatrix} \\ \text{EVENTSTR} = E_1 = e_1\text{: process} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} \text{CONST} = \text{d} \\ \text{FORMAL} = \text{Unbounded event} \\ \text{AGENTIVE} = \lceil_{\text{Event}}\ \text{x GO}_{\text{Temp}}\ \lceil_{\text{Path}}\ \text{FROM a TO b}\rceil\rceil\ (e_1) \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

sing away を一例に考えた場合、*away* の主体役割の移動主項に、活動動詞の活動事象が編入される。(16b)の主体役割は、動詞が表す活動事象が連なって、ある特定の地点（概念化者の静止している地点）を連続的に通過することを表し、GO の意味場は時間になる。移動主 x は非有界的事象であるため、文全体の事象構造も継続事象になる。このように、*away*

---

[6] (16a)の活動動詞のクオリアは小野(2005: 28, 30)のものとは異なる。Pustejovsky(1995:76)では、構成役割ではその語を構成する意味を取り扱うこと、形式役割ではその語とより大きなドメインを区別する意味を取り扱うことが言及されている。(16a)のクオリアは、Pustejovsky による説明に倣ったもので、(16a)の活動動詞の構成役割に動詞の意味を構成する一部として、手段や様態の意味を記載する。(16a)の形式役割には他の動詞の意味クラスと区別する情報として、非有界的事象であることが記載される。

の継続相の意味は、*away* と活動動詞の主体役割の意味情報の合成によって引き出される。

3.2 移動様態動詞と *away* の共起

Jackendoff (1990:88-90)では、移動様態動詞の LCS は、*laugh, sneeze* のような活動動詞と同じ MOVE 関数で表されたが、本稿では、経路表現と共起可能か不可能かの違いを考慮して、活動動詞とは異なる移動様態動詞の意味表示を提案する。(17)の主体役割は移動様態動詞自体が活動と移動の両方の意味を兼備えていることを表し、事象構造はその活動と移動が同時に起こっていることを表す。[7] 影山・由本(2001: 160)によれば、舞踊動詞の場合、踊ることで自然と踊り手の位置が移動していく。(17)の主体役割はこの観察を表している。

(17)
$$\left[\begin{array}{l}\text{manner of motion verb}\\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{ARG1 = x: physobj}\\ \text{S-ARG1 = d: characteristic manner of motion}\end{array}\right]\\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l}E_1 = e_1\text{: process}\\ E_2 = e_2\text{: process}\\ \text{RESTR} = \circ_\alpha\\ \text{HEAD = Unspecified}\end{array}\right]\\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l}\text{CONST = d}\\ \text{FORMAL = Unbounded event}\\ \text{AGENTIVE = } [_{\text{Event}}\ \text{x ACT}]\ (e_1),\ [_{\text{Event}}\ \text{x GO}\ [_{\text{Path}}\ \ ]\ (e_2)\end{array}\right]\end{array}\right]$$

(17)の意味表示は、移動様態動詞と共起する *away* の意味解釈がなぜ二つになり得るのかを説明可能にする。*away* の二つの解釈は移動様態動詞の主体役割に起因する。活動動詞の主体役割の活動事象と移動事象は同時に起こるため、*away* と合成する際、*away* は動詞の主体役割の活動事象にも移動事象にも合成し得る。どちらと合成するかは動詞がどう解釈されるかに拠る。*away* と共起する移動様態動詞が活動の意味で解釈される場合、(18a)のように、動詞の主体役割の活動事象と *away* の主体役割の移動事象が合成する。この場合、*away* の GO 関数の移動主項に動詞の活動事象が組み込まれ、*away* は継続相の意味になる。

(18) a.
$$\left[\begin{array}{l}\text{Bill walked/danced away}\\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{ARG1 = x: Bill}\\ \text{D-ARG1= a: a particular point}\\ \text{D-ARG2= b: an unspecified point}\\ \text{S-ARG1 = d: walking/dancing manner}\end{array}\right]\\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l}E_1 = e_1\text{: process}\\ E_2 = e_2\text{: process}\\ \text{RESTR} = \circ_\alpha\\ \text{HEAD} = e_1\end{array}\right]\\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l}\text{CONST = d}\\ \text{FORMAL = Unbounded event}\\ \text{AGENTIVE = } [_{\text{Event}}\ [_{\text{Event}}\ \text{x ACT}]\ \text{GO}_{\text{Temp}}\ [_{\text{Path}}\ \text{FROM a TO b}]]\ (e_1),\\ \qquad\qquad [_{\text{Event}}\ \text{x GO}\ [_{\text{Path}}\ \ ]\ (e_2)\end{array}\right]\end{array}\right]$$

[7] (17)の移動様態動詞の意味表示は主体役割に移動事象を含む点で、Pustejovsky(1995: 125)の移動様態動詞の意味表示と異なる。主体役割に移動概念を含む理由は、移動様態動詞と経路表現の共起は移動様態動詞に移動概念があることに起因していると本稿では考えるからである。

b. $\left[\begin{array}{l}\text{Bill walked/danced away}\\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{ARG1 = x: Bill}\\ \text{D-ARG1= a: a particular point}\\ \text{D-ARG2= b: an unspecified point}\\ \text{S-ARG1 = d: walking/dancing manner}\end{array}\right]\\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l}E_1 = e_1\text{: process}\\ E_2 = e_2\text{: process}\\ E_3 = e_3\text{: state}\\ \text{RESTR} = \circ_\alpha(e_1, e_2), <\circ_\alpha(e_1\&e_2, e_3)\\ \text{HEAD} = e_3\end{array}\right]\\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l}\text{CONST = d}\\ \text{FORMAL} = [_{\text{State}}\ \text{x NOT BE } [_{\text{Place}}\ \text{AT a}]] \ \&\ [_{\text{State}}\ \text{x BE } [_{\text{Place}}\ \text{AT b}]]\ (e_3)\\ \text{AGENTIVE} = [_{\text{Event}}\ \text{x ACT}]\ (e_1),\ [_{\text{Event}}\ \text{x GO } [_{\text{Path}}\ \text{FROM a TO b}]]\ (e_2)\end{array}\right]\end{array}\right]$

一方、*away* と共起する移動様態動詞が移動の意味で解釈される場合、(18b)のように、動詞の主体役割の移動事象と *away* の主体役割の移動事象が合成する。この場合、動詞の GO の経路項に、*away* の経路項が融合されて、*away* は方向の意味になる。

本分析では、*away* が移動様態動詞の主体役割のどちらの事象と合成するかは、動詞がどう解釈されるかに依存する。ただし、*away* は本来的に空間移動を表すため、移動様態動詞と共起する際、*away* は移動様態動詞の移動事象と合成することが優位であると考えられる。舞踏動詞は、Levin(1993: 179, 269)によれば、移動様態動詞でもパフォーマンス動詞でもある。そのため、舞踏動詞の意味表示として、移動様態動詞の意味表示も活動動詞の意味表示もどちらも選択される可能性がある。どちらを選択するかは個人のレキシコンの違いに還元され、それに伴い、*away* の解釈も異なってくる。ここでは、Pustejovsky(1995)で提唱される意味表示を用いれば、LCS では説明できなかった語と語の合成が説明可能となり、さらに、*away* の解釈を引き出すプロセスを体系的かつ形式的に扱えることを示した。

3.3 音放出動詞と *away* の共起

Levin (1993: 235)の動詞の分類では、*rumble, roar, wheeze* のような経路表現と共起し得る動詞は、経路表現と共起することができない *chatter, cry, sing* のような動詞と共に、音放出動詞に分類される。この分類法を踏まえて、音放出動詞の意味表示として、(19)を仮定する。(19)の構成役割に各音放出動詞に特有の音が指定される。

(19) $\left[\begin{array}{l}\text{sound emission verb}\\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{ARG1 = x: physobj}\\ \text{S-ARG1 = d: characteristic sound}\end{array}\right]\\ \text{EVENTSTR} = [\ E_1 = e_1\text{: process}\ ]\\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l}\text{CONST = d}\\ \text{FORMAL = Unbounded event}\\ \text{AGENTIVE} = [_{\text{Event}}\ \text{x ACT}]\ (e_1)\end{array}\right]\end{array}\right]$

(19)の最大の特徴は、音放出動詞自体は活動動詞であるため、音放出動詞の意味表示は、(16a)の活動動詞と同じであることだ。このため、音放出動詞と *away* が共起する場合、活動動詞と *away* が共起する場合と同じ合成プロセスを経て、*away* は継続相の意味で解釈さ

れることになる。しかし、(4)と(5)で取り上げたように、*away* が音放出動詞と共起する場合、主語名詞の意味によって、*away* は継続相だけではなく、方向の意味にもなり得る。

(20) a. The bullet *whistled away*. (=4a)

b. The kettle *whistled away*. (=4b)

(21) a. The truck *rattled away*. (=5a)

b. The sewing machine *rattled away*. (=5b)

以下では、音放出動詞と共起する *away* が継続相の意味になる場合と方向の意味になる場合では、主語名詞の意味情報にどのような違いがあるのかを比較しながら、*away* が方向の意味になる場合、共合成という操作によって、主語名詞のクオリアの意味情報が、文全体の意味として受け継がれることを主張する。まず、*away* が継続相を意味する(20b)の例から考えてみよう。(22a)は主語名詞 *kettle*、(22b)は音放出動詞 *whistle*、(22c)は文全体の意味表示である。

(22) a.
$$\left[\begin{array}{l}\text{The kettle}\\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{ARG1 = x:physobj, artifact}\\ \text{D-ARG1 = c: water}\\ \text{D-ARG2 = d: sounds}\end{array}\right]\\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l}E_1 = e_1\text{: state}\\ E_2 = e_2\text{: process}\\ \text{RESTR} = <\circ_\infty\end{array}\right]\\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l}\text{TELIC}\\ \text{(PURPOSE) = [[}_{\text{Thing}}\text{ c [}_{\text{Place}}\text{ IN x]] BECOME [[}_{\text{Thing}}\text{ c [}_{\text{Place}}\text{ IN x]] BE HOT]]}(e_1)\\ \text{(CHARACTERISTIC ACTION) = [}_{\text{Event}}\text{ x ACT WITH d]}(e_2)\end{array}\right]\end{array}\right]$$

b.
$$\left[\begin{array}{l}\text{whistle}\\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{ARG1 = x: kettle}\\ \text{S-ARG1 = d: whistling sounds}\end{array}\right]\\ \text{EVENTSTR = [} E_1 = e_1\text{: process]}\\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l}\text{CONST = d}\\ \text{FORMAL = Unbounded event}\\ \text{AGENTIVE = }\lceil_{\text{Event}}\text{ x ACT}\rceil\ (e_1)\end{array}\right]\end{array}\right]$$

c.
$$\left[\begin{array}{l}\text{the kettle whistled away}\\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{ARG1 = x: [}_{\text{Event}}\text{ x ACT]}\\ \text{D-ARG1= a: a particular point}\\ \text{D-ARG2= b: an unspecified point}\\ \text{S-ARG1 = d: whistling sounds}\end{array}\right]\\ \text{EVENTSTR = [}E_1\text{ = process]}\\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l}\text{CONST = d}\\ \text{FORMAL = Unbounded event}\\ \text{AGENTIVE = [}_{\text{Event}}\text{ [}_{\text{Event}}\text{ x ACT] GO}_{\text{Temp}}\text{ [}_{\text{Path}}\text{ FROM a TO b]] }(e_1)\end{array}\right]\end{array}\right]$$

(22a)の主語名詞 *kettle* の目的役割には、お湯を温めるという本来的な目的の他に、「やかんは音を伴って動作する」というやかん特有の動作に関する情報が記載される。この情報を基に、音放出動詞 *whistle* が表す音は、やかんの動作に伴う音と同定され、(22b)の音放出動詞 *whistle* の動作主項 x に、*kettle* の意味が融合される。(22b)の音放出動詞の意味表示は、活動動詞と同じ意味表示である。従って、(22b)の音放出動詞が *away* と共起する場合、活

動動詞と *away* が共起する場合と同じ概念作用が起こる。その結果、(22c)のように、音放出動詞が表す活動事象は、*away* の主体役割の GO 関数の移動主項に編入される。*away* は動詞が表す活動事象の時間軸上の移動を表し、継続相の意味で解釈される。

次に、*away* が方向の意味で解釈される(20a)の文について考えてみよう。(23a)は主語名詞 *bullet* の語彙表示である。(23a)の主語名詞 *bullet* と(22a)の主語名詞 *kettle* の最大の違いは、*kettle* と違って、*bullet* の場合、音が弾丸の移動に伴う音であることだ。*bullet* の場合、目的役割の弾丸特有の動作に関する情報として、「弾丸が音を伴って移動する」ことが指定される。

(23) a.
$$\left[\begin{array}{l}\text{The bullet}\\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{ARG1 = x: physobj}\\ \text{D-ARG1 = c: target}\\ \text{D-ARG2 = d: a sound}\end{array}\right]\\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{E1 = e1: process}\\ \text{E2 = e2: state}\\ \text{RESTR = }<\circ_{\alpha}\end{array}\right]\\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l}\text{FORMAL = bounded thing}\\ \text{TELIC}\\ \text{(PURPOSE) = [c BECOME [c BE DEAD]]]}(e_2)\\ \text{(CHARACTERISTIC ACTION) = [}_{\text{Event}}\text{ x GO [}_{\text{Path}}\quad\text{] WITH d]}(e_1)\end{array}\right]\end{array}\right]$$

b.
$$\left[\begin{array}{l}\text{whistle}\\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{ARG1 = x: }\left[\begin{array}{l}\text{bullet}\\ \text{FORMAL= bounded thing}\end{array}\right]\\ \text{S-ARG1 = d: a whistling sound}\end{array}\right]\\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l}E_1 = e_1\text{: process}\\ E_2 = e_2\text{: process}\\ \text{RESTR = }\circ_{\alpha}\end{array}\right]\\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l}\text{CONST = d}\\ \text{FORMAL = bounded event}\\ \text{AGENTIVE = [}_{\text{Event}}\text{ x ACT] }(e_1)\text{, [}_{\text{Event}}\text{ x GO [}_{\text{Path}}\quad\text{]]}(e_2)\end{array}\right]\end{array}\right]$$

c.
$$\left[\begin{array}{l}\text{the bullet whistled away}\\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l}\text{ARG1 = x: }\left[\begin{array}{l}\text{bullet}\\ \text{FORMAL= bounded thing}\end{array}\right]\\ \text{D-ARG1= a: a particular point}\\ \text{D-ARG2= b: an unspecified point}\\ \text{S-ARG1 = d: whistling sound}\end{array}\right]\\ \text{EVENTSTR} = \left[\begin{array}{l}E_1 = e_1\text{: process}\\ E_2 = e_2\text{: process}\\ E_3 = e_3\text{: state}\\ \text{RESTR = }\circ_{\alpha}(e_1, e_2), <\circ_{\alpha}(e_1\&e_2, e_3)\\ \text{HEAD = }e_3\end{array}\right]\\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l}\text{CONST = d}\\ \text{FORMAL = [}_{\text{State}}\text{ x NOT BE [}_{\text{Place}}\text{ AT a]], [}_{\text{State}}\text{ x BE [}_{\text{Place}}\text{ AT b]]}(e_3)\\ \text{AGENTIVE =[}_{\text{Event}}\text{ x ACT] }(e_1)\text{, [}_{\text{Event}}\text{ x GO [}_{\text{Path}}\text{ FROM a TO b]] }(e_2)\end{array}\right]\end{array}\right]$$

主語名詞 *bullet* と音放出動詞が共起する場合、*bullet* の目的役割にある銃弾特有の動作に関する情報を基に、音放出動詞が表す音は銃弾の音と同定される。さらに、その音は銃弾の移動に伴う音であることから、共合成によって、(23b)のように、主語名詞句 *bullet* の主体

役割の意味情報が動詞の主体役割の意味として受け継がれる。また、銃弾は一発で、有界性を持つため、動詞の事象構造も有界事象になる。(23c)は(20a)の文全体の意味表示である。(23b)の意味表示を持つ音放出動詞と *away* が共起することで、*away* の主体役割の移動事象と(23d)の主体役割の移動事象が合成し、*away* の経路項が動詞の経路項をさらに指定し、*away* は方向の意味で解釈される。音放出動詞が(20a)のような文で使用される場合、音放出動詞自体があたかも移動の意味を持つかのように見えるが、本分析では、音放出動詞と共起する主語名詞の意味情報から移動概念が文全体の意味に引き継がれることを示した。(21)の事例も(20)と同じ分析を適応することで、*away* の解釈の違いが説明できる。

4. まとめ

本稿では、*away* の解釈が文脈や個人差によって左右される移動様態動詞と *away* の組合せの事例や、同じ音放出動詞と *away* の組合せでも、主語名詞の意味によって、*away* の解釈が異なる事例を取り上げて、*away* の適切な解釈を引き出す道具立てとして、LCS による分析では限界があることを指摘し、Pustejovsky (1995)で提唱される意味表示を使うことで、項に現れる名詞によって解釈が異なる現象も説明できるようになることを論じた。

References

Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.

Jackendoff, Ray (1990) *Semantic structure*. Cambridge, MA: MIT Press.

Jackendoff, Ray (1997) Twistin' the night away. *Language* 73:534-59.

Jackendoff, Ray (2002a) *Foundations of language*. Oxford: Oxford University Press.

Jackendoff, Ray (2002b) English particle constructions, the lexicon, and the autonomy of syntax. In: Nicole Dehé, Ray Jackendoff, Andrew Mclntyre and Silke Urban (eds.) *Verb particle explorations*, 67-94. Berlin: Mouton de Gruyter.

Jackendoff, Ray (2010) *Meaning and the lexicon*. Oxford: Oxford University Press.

影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合に向けて—」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム No. 1』 65-101. 東京：ひつじ書房.

影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』東京：研究社.

Kearns, Kate (2011) *Semantics*. Second edition. New York: Palgrave Macmillan.

Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the flesh*. New York: Basic Books.

Levin, Beth (1993) *English verb classes and alternations*. Chicago: University of Chicago Press.

小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』東京：くろしお出版.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative lexicon*. Cambridge, MA: The MIT Press.

高見健一 (2015) 「Time-away 構文の適格性条件」秋元実治・青木博史・前田満（編）『日英語 の文法化と構文化』41-73. 東京：ひつじ書房.

由本陽子 (2011) 『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』東京：開拓社.